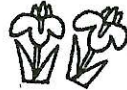


ならの木便り

節句にちなんで



新年度を迎えて、年中・年長児が登園を始めて間もなく入学式を迎えました。

なかなか治まらないコロナウイルスの流行の為に、クラス懇談会も保護者総会も五月に延期、そして給食試食会も中止せざるを得なくなり、残念に思っております。

今年は、新しい取り組みとして、お誕生会に皆で食べるケーキを和菓子にかえてみることにしました。

季節を表現した練菓子です。あじさい・紅葉・梅の花など、世界に誇ってもいい日本独自の美しいお菓子です。折々に変化する四季を持つ日本だからこそ生まれたものだと思います。ケーキに慣れた子どもたちにどれだけ受け入れられるか不安がありますが、日本にはこんな素敵なお菓子があるのだということ、そして、四季折々の雰囲気をお菓子で味わって見て欲しいと思っています。

新しい試みを取り入れた第一回目の誕生日会は五月二四日、この月は節句をイメージした菖蒲なのかなと思いますが、五日をかなりすぎているので少々悩みます。

五月五日、端午の節句といいますが、飯倉晴武氏監修の『日本人礼儀作法のしきたり』という本を開いてその謂れを読みました。皆さんに紹介いたします。

～前略～ 端午の「端」は月の初め、「午」は午の日を意味する言葉で、古来、中国では野外に出て薬草を摘み、ショウブ酒を飲むなどして、病氣・災害を払う日とされてきました。この行事が日本に伝わり、日本の風習とも結びついたのが端午の節句です。日本ではもともとは女の子のお祭りでした。

早乙女たちが田植えの前、「五月忌み」といってケガレを清めるため、仮小屋などにこもって、邪気を払うと信じられていたショウブやヨモギを摘み、軒下に吊したり、ショウブを浮かべた湯で湯あみをしていたといえます。

やがて、このショウブが「尚武」や「勝負」に通じることから武家社会に引き継がれ、本来は女の子の祭祀なのが、男の子を祝う行事に変わっていったのです。

江戸時代に入ると、魔除けとされていたヨモギで作った人形は武者人形となり、「龍門を登って鯉が龍になった」という中国の故事から鯉のぼりを立てるようになり、五月五日は完全に男の子の節句になったのです。ふき流しや鯉は邪気を払い、子どもの成長を祝うだけではなく、一家の開運につながるシンボルになりました

子どもが初めてこの日を迎える初節句では、里方や親戚が武者人形や鯉のぼりを贈って祝います。そのお返しにチマキや柏餅を作りました。

チマキは、中国の詩人屈原の故事によるもので「茅チマキの葉で包み、糸で結んだ米は龍

(邪悪)を寄せ付けない」効果ありといえます。柏餅は、柏が新しい葉が生えないと古い葉が絶えないことから、後継者が絶えない、子孫繁栄の願いが込められているといえます。五日の夜に入るショウブ湯も、鋭い剣を思わせる歯の形と独特の芳香が邪気を払い気分を爽やかにして、夏バテをしないなどの健康効果があるといわれてきており、今なお盛んに行われている習慣です。

日本の民話で『食わず女房』というのがあります。古くから語り継がれている話で、絵本にもなっております。これはヨモギと菖蒲のお陰で難を逃れたという話です。

内容は紹介しますと、昔あるところにとても貧乏でけちな坊な男がおりました。嫁を貰う年になったのだけれどなかなかお嫁さんを貰おうとはしません。

「俺のうちは貧乏だから、ご飯を食うような嫁はもらえない。ご飯を食べないでよく働く嫁ならもらっても良いのだが」と、いつもそう言っておりました。

ある夜のこと、「今晚は、今晚は」と言っておく人がいるので開けてみると、そこには、とても美しい女の人が立っておりました。

「私はご飯を食べません。一生懸命働きますのでお嫁に貰って下さい」

男は、その女の人を見ると、とてもきれいな人だったので一目ですっかり好きになってしまいました。

「この人こそ俺の嫁だ。ご飯を食べないなんて俺にピッタリだ。」と思ってすぐに嫁にしました。

それからというもの、その嫁は実によく働くし本当に全くご飯を食べません。

そのうちに、男はそれを不思議に思うようになってきました。どうしてご飯を食べないでいられるのだろう。不思議に思った男が、ある日見た女の人の正体は恐ろしい山姥でした。

正体を見られた山姥は、男を木の風呂桶に入れてそれを担ぐと山奥の住家に向かって走り始めました。男は、たまたま木から伸びている枝を目にして、それを掴んで逃げ出しました。それに気づいた山姥が、ご馳走を逃がしてなるものかと、恐ろしい形相で追いかけてくるのを、池の水のなかに隠れました。そこにはヨモギと菖蒲が沢山は生えておりました。山姥はそれに触れると腐って溶けてしまうのです。地団駄を踏んで悔しがらる山姥、でもどうすることも出来ずに山に帰って行きました。こうして男は無事に家に戻ったということです。

日本各地に語り伝えられた話です。あまり欲の深いことをいうと思わぬ落とし穴にはまるぞ、ということでしょうか。

浜野和子